

# 怖い夢

文筆業

かねだこういちろ  
金田浩一 呂

よく聞く怖い夢の話に、入学試験がある。怖い、というのだから落ちた夢か、落ちそうになる夢だろう。

幸いというか、私は入学試験の夢は見ることがない。代わってしばしば見たのが、卒業できていない夢である。今でこそないが、中年までは何度か見て恐怖にふるえて目を覚ました覚えがある。

具体的にどんな夢かというと、会社の人事部に呼び出され、お前は大学を卒業してないではないか、履歴詐称だ、と言われるのである。最近、国会議員の履歴詐称が問題になったが、あれは恥にはなっても首にはならないだろう。私の場合は十分、首につながらず詐称だろうから、恥だけではすまず、もつと怖い。

この恐怖の夢には、もちろん根拠

がある。後輩も読む雑誌に、こういうことを書くのは、いかがなものか、とも思うが、いわゆる苦学生だった私は、試験のときを除いて全く学校に出なかった。

当然、四年では単位を取れず、留年の末、ようやく卒業。ある新聞社にもぐりこんだのだが、この時、卒業証明書は後で出すということにして入社したのである。

しかし、この時のわたし自身、卒業できているかどうか全く分かっていなかった。理由は二つあって、一つは最後に受けた試験で、卒業に足る単位を取れているかどうか、つまり合格点に達しているかどうか、分からなかったこと。

学校に問い合わせれば済むこと、と思われるかもしれない。だが、第一の理由として学費を未納だった

私は、学校に聞くのも怖くてできなかったのである。

結果は、学校から宮崎の実家に学費の請求書が届き、県庁に勤めていた妹が払って卒業証書を受け取っていたことが、大分経ってから分かった。その間、実家とも音信不通で、いつ会社から卒業証書を出せ、と言



われるかと、戦々恐々としていたのが、その後の悪夢の原因になったと思われるのである。

『Hakumo n chūchūおう』から随筆を書け、

という注文を受けた。劣等生だった私が、さて何を書いたらいいものかと、その夏季号をめくっていたら、松本道介教授の連載「ときには、辛口」が目に入った。

松本氏の明快な評論にはかねて共感するところがあり、何げなく読み始めると、冒頭にやはり中大教授を

勤められた高橋健二氏の話が出てくる。卒業式で「最前列に並ぶ総代諸君のように高空飛行で悠々と卒業された方もあれば、超低空飛行で見事に卒業された方もありましょう」といった表現で皆を笑わせながら見事な講演をされたという話である。

高橋さんとは氏が日本ペンクラブ会長時代、産経新聞文化部のペン担当記者として、よく話をしてもらった懐かしい思い出もある。なるほど、たまには超低空飛行の卒業生の話もよかるうと、こうして恥をさらした次第である。

ところで、話はガラリと変わるが、私は定年後、帝京大学の非常勤講師を数年務めたことがある。ご存じの通り中央大学のすぐ側である。八王子に行く度に校舎を眺め、一度、新キャンパスをのぞいてみたいものと思いつながら、ついに意を果たせなかつた。そのうち機会を作って訪問したいと思っている。

(昭和32年法学部卒)